

新島襄と聖書

奨励	小原 克博【こはら・かつひろ】
奨励者紹介	同志社大学神学部教授
研究テーマ	キリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究

一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行くこととされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

(ルカによる福音書 二四章二八―三五節)

宇宙の創造

同志社スピリット・ウィークということで新島襄について少し話をしたいと思います。その話の前に、皆さんは「天使と悪魔」という映画を観られたでしょうか。あるいは小説を読まれたでしょうか。これのネタ話をするようなつもりはありませんが、映画のもとになった『天使と悪魔』を書いたダン・ブラウン、彼はご存じのとおり、世界中で話題になった『ダ・ヴィンチ・コード』の著者でもあります。『ダ・ヴィンチ・コード』を読んでも『天使と悪魔』でも彼の博覧強記ぶりに驚かされます。物語のプロットが非常に魅力的に仕立て上げられており、そしてその資質は、彼が学んだアーモスト大学におけるリベラルアーツ教育と非常に関係があるのだろうと思います。そしてアーモスト大学で学んだダン・ブラウンは、間違いなく新島襄のことを知っていたはずです。
そういう接点もあるのですが、今日は「天使と悪魔」をテーマのきっかけとして、話を始めたいと思います。この話は、科学と宗教の対立、これが一つの背景にあります。極小の粒子、物質と反物質という名前で物語に登場しますが、人間や宇宙のすべてをつくっている極小の粒子を解明することによって宇宙の創造、巨大なる宇宙を説明し、神がそこにどう働かれたかということも証明できるはずだということを、ある科学者が言い始めるところから物語が始まっていくのです。そういう天地創造をめぐる物語には、数々のストーリーがあるのですが、『天使と悪魔』は極小のものと極大のものをつなぐ面白さをもっています。

新島と聖書の出会い

新島もアメリカに行こうとしたときに、ある意味で天地創造をなした神と出会います。どういうきっかけで出会ったのか。彼がアメリカに行こうとしたきっかけはいくつかあるのですが、『連邦史略』というアメリカの地歴書を読み、彼はアメリカの政治制度、とりわけ大統領制度があることを知って驚愕するのです。また、『ロビンソン・クルーソー物語』を読んで、若き新島の冒険心はかき立てられます。しかし彼は非常に親思いであり、家族思いでありましたから、親、家族を捨てて国禁を犯してまで出ていくには、最後の一押しが必要でした。最後の一押しをしたのが、おそらく聖書との出会いだったのです。江戸末期において彼が手にすることのできる聖書というものは非常に限られたものであったはずです。一説によると、江戸末期においても極秘の聖書研究会はなされていたようですが、言うまでもなく聖書全体が揃った形ではありません。新島が手にした聖書はいわゆる私たちが持っている聖書のすべてではなく、エッセンスだけを集めた小冊子を新島はどこかで入手したのです。
実はこのあたりの経緯は彼自身、新島自身が記した手紙の中に記されています。有名な手紙なので読まれた方も多いかと思いますが、新島襄は一八六四年に国禁を犯して出ていくのですが、一八六五年、一年かけてようやくボストン港に到着します。しかし当時のアメリカは南北戦争が終わって経済的にも疲弊していた時代ですので、アメリカ人ですら職を見つけだすことが難しい。そしてちょっと町に入れば失業者が溢れているような状況ですから、外国人の新島がボストンにたどり着いたところで行くあてもないわけです。もちろん身寄りもありません。下手するとそこで野たれ死にをする。ようやく一年かけて志を遂げようとしているとき、行く当てもないときに、たまたま乗り合わせたワイルド・ローバー号の船主のハーディという人を紹介してもらいます。そこでいわば命を繋ぐ最後のツテとしてハーディに手紙を認（したた）めるのです。
最初、彼はハーディと直接話のですが、新島の英語はまだ十分ではありませんでしたので「あなたのことを手紙に書いてくれ」と言われて手紙を記します。その手紙が今も残されています。『現代語で読む新島襄』という本から一部を少し紹介してみたいと思います。彼は自分がどこで生まれて、どのように育ち、なぜ脱国に至ったのかを語っていく。その中に聖書との出会いが記されています。このように記しています。
「ある日、友人を訪ねると、彼の書斎で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中のもっとも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔（はりつけ）にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ」。
小冊子、しかも漢文で書かれた小冊子だということがわかります。日本語ではなく中国でつくられたであろう漢訳の聖書の一部を抜粋したものを新島は手にして、しかもそれをこっそりと夜に読んだということです。いつかったからといって当時、磔にされるとは思いませんが、まだキリシタン禁制の高札が立っていた時代ですから、おおっぴらに聖書を読むことは憚（はばか）られていました。ひっそり隠れるように聖書を読むなかで、何を読み取ったのかを新島は書くのですが、その一部を紹介したいと思います。
「私はその本を置き、あたりを見まわしてからこう言った。『誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実にとここの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない』」。新島はもっとちゃんとした聖書を読みたいという気持ちが大きくなっていくのです。そして彼が超えられなかった一線、家族思いで家族を残しては国を捨てることのできないという新島を最後に一押ししたのが、まさに創造主なる神との出会いであったということです。ここは断片的な小さな、小さな聖書の一節が新島の心をとらえて、天地創造の神と出会わせたのです。先ほど、『天使と悪魔』の話に触れましたが、小さなものが大きな世界を見させていく、そういうきっかけをつくったエピソードが記されています。

私と聖書の出会い

私がこの新島の手紙を読んだのは、はるか昔の学生時代ですが、とても感銘を受けました。新島は、ひっそりと聖書を読んだ。そして聖書が新島の心をとらえたのです。実は私にも、少し似た経験があります。私とキリスト教の出会いを少しだけお話ししたいと思います。私は、小学校二年生くらいのときから、学校のすぐ近くの女性宣教師が無料で英語を教えてくれる小さな塾に通っていました。その塾で、だんだんと英語の学習が進んでくると英語を使って聖書を読んだり、英語でお祈りをするということもありました。小学校四年生のころ、宣教師から、きれいなカラーの挿絵が入った日本語の新約聖書をもらいました。実は英語を学び聖書を学ぶだけでなく、当時、カルチャーショックに似たような経験をしました。その宣教師のお宅で初めてビートルズの曲を聴き、とてもショックを受けたのです。当時の私たちは歌といえばアニメソングくらいしか知らないわけですが、そういうものを口ずさむ小学生でしたが、こんなすごい音楽があるのかと思い、それ以来私はビートルズファンになりました。音楽についてもいろいろなことを教えてくださって、宣教師の方から学んだ英語、聖書、欧米の文化は、日本人の小学生の私が知らない全く新しい世界をかい見させてくれる経験になりました。そういう経験のなかで私はあるとき、聖書をもって家に持ちかえり、しげしげと小学生ながらに読みました。
結構難しいなという印象がありました。でも最初の方の何々による福音書というのは読めそうだということで頑張って読みました。読んでいくと同じことが繰り返し書かれていることに途中で気づきました。マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書、似ています。似ているけれど、どうしてこんなに似ているのだろうか。でも違うところもある。すごく悩みました。大学に入って神学を学んでから、謎が一気に解けました。共感福音書というものがあるのです。本当に感動しました。小学生のときに悩んで、悩んで、結局解けなかった悩みに現代の聖書学はある種の答えを示してくれています。これも私にとっての大きな発見でした。
小学生のときに聖書を読んで大事に本棚にしまっていました。ところがあるとき、その聖書が、ごみと一緒にごみ箱に捨てられていたのです。母は何も言いませんでした。おそらく母は、私の許可もとらずに勝手に捨てたのです。見当らずさがしていると、ごみと一緒に聖書が捨てられている。それを見てびっくりしたのですが、親が見せたくないと思うくらいのもので、ここにあるのだ。これは大事にしないといけないと思い、それをごみ箱から救出して隠しておきました。何か読ませたくないものがあるということに、子どもは惹かれるわけです。はつきりしたことは、わからなかったのですが、聖書を大事にしよう、ここに何かがあるに違いないと思い、私はひそかに聖書を読みました。そういう経験がありましたので、新島の一節を読んだときに自分の小学生時代と重なって、もちろん時代は違いますが、聖書が一人の若者をどう導いていくかということにすごく関心を寄せたわけです。

新島と聖書の第二の出会い

新島の聖書との出会いというのは何段階もあるのですが、小さな冊子との出会いを新島と聖書の第一の出会いとするならば、大きく第二の出会い、第三の出会いと分けて考えることができるかと思います。第二の出会いはいったったのか。新島は一八六四年に脱国をして一年かけて大西洋経由でボストンにたどりつくのですが、途中、アジアのほうほうの港を経由していくのです。ワイルド・ローバー号は商船でしたから荷物を積んだり、下ろしたりを繰り返して上海、香港と渡っていきました。新島はそもそも脱国するときにほとんどのものを持っていなかったのですが、高価なものをつだけ持っていました。刀です。大きな太刀と小刀と二種類の刀を持っていて、それは今、同志社が所蔵しています。大きい方の刀は上海で船賃代わりに船長に渡しています。香港に寄港したときに小さい刀を売って、そのお金、当時のハドルで初めて漢訳の聖書を買いました。この聖書はすべてが揃った漢訳の聖書です。脱国した一八六四年の香港で彼は初めてすべてが揃った新旧約聖書と出会うことになります。実はこの新島が香港で購入した聖書の実物は現存していませんが、一部だけ残っていま

す。本を開くと表紙をめくってすぐのところに表の表紙が一枚ありますが、そこにいつ、この聖書を買ったという新島の筆書きがあります。その部分だけがなぜか切り離されて新島遺品庫に所蔵されています。残っているのはその一枚の表紙だけで、実際に新島が買った漢訳聖書はどういうものなのか、誰もわからないのです。ひょっとしたら、どこかでまだ眠っているかもしれない。あるいは、この世から消えているかもしれませんが、新島が書いた筆書きによれば、元治何年とありますので、一八六四年十一月十一日にその聖書を購入したことがわかります。

香港での聖書探し

実は私は今年三月、香港に行きました。香港にある神学の研究センターと共催のシンポジウムをするためだったのですが、新島襄研究の大家・本井康博先生も一緒でした。ちょっとした経緯がありまして、香港に行くのなら新島襄が最初に買った一八六四年版の漢訳聖書を入手できないかと考えました。同志社はそれを持っています。新島襄の最初の聖書ですから、とても貴重なものです。同一のものはないにしても同じものがあれば古本屋で買ってこいというミッションを受け、事前に下調べして、行きました。香港についてからも本屋さんを訪ねたり、向こうの先生に古本屋はないですかと聞いたりしました。しかし、香港には古本屋さんはほとんどないのです。ゼロに近い。古いものがなくて、ものそのものを買うことは難しいとわかりました。

後にわかったのですが、そもそも一八六四年頃の聖書は中国でも非常に貴重なものになっていて、簡単に手に入りません。しかしどこか行くたびに「新島襄が一八六四年に香港に寄って」と繰り返して言っていたので、あちらの先生が気の毒に思って、いろいろ手を尽くし専門家の方にも聞いてくださり、「インフ・カレッジに行けばひょっとしたらそれに近いものが見られるかもしれない」と教えてくれました。カレッジといっても、大学ではなく小学校から高校までの学校です。ホテルから近かったので、校長先生と約束をとりつけて、帰国当日でしたが、午前中にインフ・カレッジに行きました。

行って私は本当に驚きました。実はインフ・カレッジはとても有名な学校でした。漢訳聖書の歴史をたどるときに絶対に忘れることができない人物がいます。一八〇七年に中国に渡来したローバート・モリソンという宣教師です。モリソンはLondon Missionary Society から派遣された宣教師でしたが、モリソンは一八〇七年に中国にたどり着いて、苦勞の末、一八一四年に初めて新約聖書の漢訳版を完成させます。そしてインフ・カレッジ、英華書院をつくるのです。これはアジアにおける聖書の歴史を考えると、もっとも有名な出版社であり、学校です。私は英華書院という名前は知っていたのですが、それがインフ・カレッジと結びつかないまま、行ったのです。行くとモリソンの銅像が建っていて、モリソンのコレクションがあり、同志社で言う新島ルームのようなものがありました。英華書院は、もともとマラッカにつくられて、イギリスの統治が始まってから香港に移り、今ある場所に移ったのですが、モリソンは、学校を営むだけでなく、学校の中に聖書を印刷するための印刷所をつくりました。自分が翻訳して、一八二三年には新旧約聖書のすべての漢訳を完成させます。漢訳聖書が日本語訳の聖書にも非常に大きな影響を与えます。もちろん初期のころは、知識人たちがモリソンの訳した漢訳聖書を断片も含めて読んだはずですし、新島が江戸末期に読んだものも、ひょっとしたらモリソンが訳したものの一部かもしれません。当時、モリソン版の他にサランポール版やデスラフ版などもありましたが、主流をなしていたのはモリソンの漢訳聖書でした。

そこでたまたま行ったのが英華書院、インフ・カレッジだったのですが、日本では通常見られないコレクションに出会いました。彼が最初につくった漢訳聖書や、聖書を翻訳する際のメモ、草稿も残っていて、ある種、執念のようなものに心を打たれたわけです。聖書を中国人や日本人が読めるように、彼はその生涯をかけたわけです。この聖書の翻訳は後には英国聖書協会に委ねられていきますので、実際には一八六四年版の新島が手にした聖書がどういうものであったか、もう少し詳しく調べなければ突きとめることはできませんが、そこには一八六四年という出版年が記された聖書も存在していました。かなり近いところまでたどり着けたという印象をもったのです。たまたま行って、知らずに出掛けてモリソンと直面することになったのですが、彼が聖書翻訳にかけた情熱に圧倒された経験でした。何とか聖書を多くの人に読んでもらいたいという情熱です。新島はその恩恵に預かることができたわけでした。

新島と聖書の第三の出会い

新島襄と聖書の第三の出会いがあります。上海でワイルド・ローバー号という商船に乗り換えて新島はさらにボストンへと旅を続けていきます。船の上で彼は購入した漢訳聖書とともに、おそらく船上で手にしたであろう英語の聖書を読み比べながら、英語の勉強もしていきます。しかし実際に彼が英語の聖書を自分のものとして手に入れたのはフィリップス・アカデミー時代だと言われています。フィリップス・アカデミー時代の学友にM・J・シアーズという人がいます。彼は、シアーズから聖書を送られています。この英語の聖書は新島は生涯愛用することになります。そして、この新島が生涯愛用した聖書は、同志社が今も所有しています。ここから徒歩二、三分くらいの所にあるハリス理化学館のなかのNeesima Roomにあります。常設展示の新島襄の自貢の杖の右横に、新島襄が生涯愛用した聖書が置かれています。関心がある方はぜひ見てください。これは新島がアメリカ時代の最も初期のころにもらって、最後までなくなるまでずっと持ち続けていた聖書です。普段は見ることもできないのですが、私はこれまで三回、新島襄の聖書を手にとってパラパラとめくってみたことがあります。本当にすばらしいものです。ただの英語の聖書ですが、至るところに赤と青の色鉛筆で印が入っています。欄外に細かい英語でたくさんの書き込みがあります。旧約聖書から新約聖書までほぼ満遍なく新島が丹念に読んでいたことがわかります。申命記とかレビ記のような、普通読むことをあまり好まれない箇所を新島が丹念に読んでいたこともわかります。それを見るにつけて聖書によって新島は生かされ、導かれ、そして同志社をつくるということを含め、生涯を導かれていったことをしみじみと感ずることができました。

読み継がれる聖書

今日の聖書の箇所は、ルカによる福音書からでした。これは途方に暮れている弟子たちの物語です。これからどうしたらいいか。慕っていた先生はいない。二人がエマオという場所に向かっていきます。するとなぜか知らないけれど、ある人が自分たちの間に割り込んで突然話をし始めるのです。あとでその人がイエスだと気づくのですが、その弟子たちが語る言葉があります。

「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」。聖書の話聞いて弟子たちの心は燃えたわけです。私も普段、聖書を読みますが、なかなか燃えないです。仕方がないから読んでいとか、研究の対象として読んでいところがありますから、なかなか燃えないのですが、新島襄の聖書を見たときには心が燃えました。モリソンが書き残した漢訳の聖書を見たときには本当に心が燃えました。なぜか。それは聖書を伝えたい、聖書を一人でも多くの人と語りあいたいという情熱が、そこにあったからです。聖書をただ一人で読むことも面白いでしょう。しかし読み継がれたものとして、聖書をともにする仲間を感じるとき、私たちは心を燃やして聖書を読むことができますということです。

私たちもまたエマオの道を歩いています。まさに途上にいる者です。その途上で聖書を読み、聖書の解きあかしを聞きます。私たちが一人でその道を歩いているのではなく、隣には新島襄がいるかもしれません。そのまた隣にはモリソンが立っているかもしれません。本当に聖書を語りたい、聖書を伝えたいという人たちと、ともに私たちは聖書を読むことができますということです。そういう聖書を、聖書が読み継がれてきた聖書の歴史を知りながら、心を燃やしながら聖書を読むことができるかどうかが問われています。ありきたりのものとして、お金を出せば買うことのできる本として聖書を読むのではなく、多くの先人たちに導きを与えてきた、そのような聖書として私たちがその聖書の言葉と出会うことができれば、深い洞察と感動を得ることができますし、また新島襄の精神の奥深いところに触れていくことができるのではないかと思います。